

31. それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。
32. しかも、はっきりとこの事がら話をされた。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。
33. しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」
34. それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」
35. いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。
36. 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。
37. 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。
38. このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」

## 説教

今日は「棕櫚の主日」で、今週は受難週です。今からおよそ二千年前のこの週の金曜日に、イエスさまは十字架で死なれました。今週はイエスさまの十字架の恵みを思い出しては感謝して過ごす時です。

共にマルコの福音書から学びましょう。

これまでガリラヤを中心に数々の奇跡を行い、多くの人々に恵みをもたらしてきたイエスさまでしたが、ピリポ・カイザリヤで「あなたがたは、わたしを誰だと言いますか」という質問に、ペテロはこう答えます。「あなたは、キリストです。」

「キリスト」とは「油注がれた者」の意味で、イスラエルを統治する王、祭司、預言者を兼ねた、神から特別に人々を助ける力を与えられている、「救い主」を意味する言葉でした。イエスさまは、単なる偉人や預言者ではない、人類を救う救い主「キリスト」だ、この告白は、これまで寝食を共にしながら最も間近にイエスさまを見てきたペテロの、いわば結論とも言うべきものでした。とは言え、これから、この告白の意味が問われることとなります。

イエスさまを「キリスト・救い主」と呼ぶのは正しい、ただし、その「救い主」とはどういう意味か、弟子たちはわかっていません。イエスさまは、すかさず、「救い主」である御自身が、「必ず多くの苦しみを受け」、「捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならない」ことを弟子たちに説明なさいます。これまで多くの病人や罪人を助けてきた力ある「救い主」イエスさまが、力なく殺されると言うのです。

このことを理解できないペテロが、イエスさまを「わきにお連れして、いさめ」ます(32)。すると、イエスさまは、ペテロを悪魔呼ばわりして、「さがれ(直訳『わたしの後ろに行け』)、サタン！」と極めて厳しく叱りつけたのでした。そして、弟子たちのみならず、「群衆」も呼び寄せて、イエスさまはこう呼びかけられました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたし(の後ろ)について来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」イエスさまの行く手を阻むペテロには、「わたしの後ろに行け」と退け、イエスさまの後ろについて行こうとする者らには、これまでのように漫然とただついて来るのではなく、「自分を捨て、自分の十字架を負い」との条件をつけて、「そしてわたしについて来なさい」と呼びかけたのでした。

これまで、権威ある神のことばを教え、病を癒やし、悪霊を追い出し、死人を生き返らせ、さらには嵐を静め、日ごとの糧を与えて、力ある「救い主」として多くの人々に感動と喜びを与えてきました。それで、「弟子」に加えて、恵みを受けた多くの「群衆」も、ぞろぞろとイエスさまにつき従ってきたのです。

つまり、これまではイエスさまに従うことは容易なことでした。要するに御利益があったからです。でも、これからは違います。キリスト告白をしたピリポ・カイザリヤからは、まっすぐにエルサレムを目指し、そこで十字架に磔にされて殺されるのです。イエスさまは物見遊山にエルサレムへ行くのではありません。そこで死ぬために行くのです。そこで「十字架を負い」、「捨てられ、殺され」るためにいきます。死に行くのです。それで、これからイエスさまについて行こうとする者は、このことをよく理解しなければなりません。イエスさまについて来るのはいいけれど、そのイエスさまはエルサレムに行って、そこで十字架にかかって死ななければなりません。そうなれば、これからイエスさまについて行く人は、主人を失ってしまうこととなります。それで、イエスさまの言う通り、覚悟が必要です。すなわち、「自分を捨て、自分の十字架を負う」覚悟です。そして、その上で、イエスさまについて行かなければなりません。

「十字架」は、当時のローマの死刑道具です。アメリカなら電気椅子、日本なら絞首台ということになるでしょう。「自分を捨て」の「捨てる」というギリシャ語は「否定する、勘当する、拒否する」の意味です。「十字架を負う」とは、当時、罪人が、処刑場まで自分が磔にされる重い十字架を「負って」行ったことを指しています。死刑囚は、処刑場に到着するや、そこで自分が背負ってきた「十字架」に磔にされて、苦しみながら死ぬこととなります。つまり、「自分を捨て、自分の十字架を負う」とは、文字通りには「十字架で死ぬ」ことを意味します。イエスさまは、ご自分がこれからエルサレムへ死に行くことを明らかにした上で、ご自分について来る者もまた同じように、「自分を捨て、自分の十字架を負い」、その上で「わたしについて来て」、最後は死ぬようにとされたのです。要するに、イエスさまは、死ぬ覚悟のある者だけ「わたしについて来なさい」と言われたのです。

これまでは様々な御利益があったから、多くの「群衆」がゾロゾロと勇み足でイエスさまについて来たのですが、ピリポ・カイザリヤからは空気はまるで一変し、これからは死ぬ覚悟のある者だけが従ってくるようにとお命じになったのです。とは言え、ただ死んで終わりという空しい人生を与えるために、イエスさまはこの世に来られたのではありません。イエスさまは、その先をしっかりと見据えておられました。

イエスさまが明かされた通り、イエスさまは「捨てられ、殺され」た後に「よみがえり」ます。すなわち、死んで三日後によみがえることをもって、なお「死してなおよみがえる」復活のいのちを、ご自分に従う者らに、もたらそうとしておられたのです。これは、この世の一切の御利益にまさる祝福です。なぜなら、どんなにこの世で御利益を得、金銭や名誉や力を得ても、死んでしまえば終わりだからです。そして、死んで地獄に行くならば、それは最も悲惨な人生の結末です。この世での苦しみは束の間であっても、死後の苦しみは永遠だからです。終わりがありません。そんなものをもたらすために、イエスさまはこの世に来られたのではありません。イエスさまが私たちにもたらしてくださったのは、永遠のいのちです。この世のあらゆる「御利益」を越えた永遠の祝福です。復活のいのちをもたらすために、これから十字架にかかります。神のさばきを受けて滅びる以外にない罪人の身代わりとなって、イエスさまは十字架で死なれるのです。

だからこそ、イエスさまに従う者もまた、このことを正しく理解しなければなりません。イエスさまに従う者にイエスさまがくださる唯一の宝は、永遠のいのちなのです。罪の贖い、赦し、永遠のいのちです。地上の御利益に目を奪われて、これを見失ってはなりません。イエスさまがくださる数々の御利益に目を奪われ、心奪われて、そこに留まっただけではなりません。イエスさまが本当に与えたいと思っておられるのは、地上の宝ではなく、金銀にまさる尊い小羊の血による罪の贖い、罪の赦し、永遠のいのちです。地上の宝に惑わされて、自分の「いのちを救おうと思う者は、それを失い」ます。死ぬべき地上のいのちに惑わされて永遠の「いのちを損じ」るのです。

このイエスさまのことばを文字通り実践したのが、使徒たちであり、殉教者たちです。日本でも多くのクリスチャンが殉教しました。彼らは、偶像崇拜を強要されても拒否して、迫害を受け、殉教します。ある者は火で焼かれ、ある者は打ち首、水責め、熱湯をかけられて、いのちを落とします。死ぬ時、懺悔しながら、あるいは讃美し、祈り、感謝しつつ、死んでいきました。彼らは、殉教こそ天国の直行できる最高の荣誉と信じて、主のために死んで、証しを残しました。クリスチャンの殉教史を読んでいると、私たちが普段生活している生活とは全く別次元の話で、目が眩む錯覚を覚えます。この世での平穩無事な人生とか御利益など、まるで彼らの眼中にないのです。教勢拡大ということも関係ありません。彼らの見つめているのは、ただ天国、永遠のいのち、復活のいのちです。殉教が何より最も荣誉なことで、次は全財産（信仰のために妻子、親族、財産）を神にささげることだ、というのです。20~30万人（現在毎週礼拝通うキリスト者人口が約15万人と言われる）が、日本の全国津

々浦々で殉教したというのですから、日本には、イエスさまの教えを証した殉教者たちの血が、びっしりと染み込んでいると言えます。こうして、約三百年にわたって弾圧され続けてきましたが、勿論、歴史上、これほどの迫害を受けたのは、日本だけです。

『丸血留の道』というキリシタン文書には、殉教の際に次のように祈るよう教えられています。「わが主イエスよ、私はみ前に何の功力もなく、いやしき悪人ですが、数限りなく与えて下さった御恩にお礼を申し上げる心も言葉もございません。とりわけ、主の御受難にはお礼の言葉也没有せん。あなたは父である神の独り子、万物の創造主でありながら、私たちの魂を救うために受肉され、御言葉と行いをもって天の道を教えるために、生涯苦しみと貧しさを凌がれて、かたじけなくも数々身を打たれ、責め苦を受け、貴いみからだを赤く血で染め、十字架の上で血を滴り尽くして、ついには卑しい下人によって命を捨てられました。何というありがたいお恵みでありましょうか。これほどのご恩に何をもって報いましょうか。たとえ千度、百度命を捨てても、それに万分の一も報いることができません。せめてご奉公として、私のもつ領地、財産、妻子と一族を悉くお捧げします。たとえ全世界を自分の手に入れても、それをあなたにお捧げします。あなたの愛と栄誉のために百苦千難に耐え、命を捨てなければならない時は、あなたの憐みにおすがりするので、信仰も心も固く、死ぬまでご奉公できるよう助けてください。どうかこの捧げ物を香ばしく受け取って下さい。この望みがかなえられるために、豊かな恵みを与えられますようにと、ひたすらお願いいたします。アーメン。」

こうして、主の教えは、この日本に於いても文字通り実践されてきました。イエスさまの教えは、ここで終わったのではなく、この教えを中心に福音宣教が前進し、キリスト教の歴史が展開します。私たちはこういう地に住んでいることに感謝しましょう。そして、信仰の先人たちのように、主の教えの通りに生きていきたいと思ひます。